

パサリ氏のこと（一）

愛甲 次郎

平成二十七年一月二十六日

エアインディアの一等席に相客は極めて珍しきことなり。隣席に口髭を蓄へたるインド紳士は話好きにて、話題は景氣に始まり終にはインド哲學に及ぶ。彼相交したる名刺をたよりに誕生祝の花束を贈り來たり、サンジャイ・クマル・パサリ氏と余の附合始まる。余ソニーに務めし頃のことなり。

余のインド出張の度に彼ホテルに余を訪れ、食事を共にし、名所を案内し、知人を紹介す。彼の伯父はマルワリーの出身にして同郷のビルラ財閥の當主の知遇を得、カルカッタにて事業を起し成功す。インド車アンバツサダーの代理店となり、市の中心部に多くの不動産を取得し、インド東北部に茶のプランテーションを經營す。余と邂逅する數年前伯父世を去り、パサリ氏家業を繼ぐ。

カルカッタに出張せし折、一日私邸に招かる。城壁の如き壁に圍まれたる豪邸にして、何家族か同居せるものと覺ゆ。ヴェジェタリアンのカレー料理の美味なること筆舌に盡くし難し。彼は敬虔なるジャイナ教徒なれば酒は口にせず。アツサムミルクティーに香料を入れたるマサラティーを酌み交しつつ夜の更くるを知らず。翌朝カルカッタ動物園に白虎を見に行く。途中地下鐵に乗る。塵一つなきプラットフォームを示しパサリ氏のいふやう、これぞインド國內にて最も清潔なる公共施設なると。次に彼の案内せしカーリーの寺院は地下鐵とは對蹠的なりき。泥まみれの參道も花や線香を賣る店も敬虔なる信者の老若男女に溢れ返り、空氣を吸ふだに躊躇せらるる趣なり。カーリーは強き利益を以つて知らるる黒き女神にしてカルカッタの名前のよつて來たる處。靴を脱ぎ供物を捧げて神前に額づきソニーのインド事業の成功を祈る。

パサリ氏、余のヒンドゥー教に關心あるを知り、その聖地を次々と案内せられき。始めに選べるはクリシュナ神の生地なるヴリンダーバンなり。寺院の奥の間の黒き闇の中よりは一陣の氣の如きもの吹き來り、數千年の古へに舞戻りたる心地す。クリシュナ神は牛飼ひ出身の古代英雄の神格化せるものにしてシヴァ神と並びインド民俗信仰の雙壁なり。次いでハリドワールを訪れぬ。これはヒマラヤを出でたるガンジス河の流れ未だ速きヒンドゥー教の聖地なり。雪解けの冷たき水に足を浸せば身も心も洗はるる想ひす。

（注1）ビルラ財閥 インド二大財閥の一

2) ジャイナ教 バラモン教に對抗する勢力として佛教に次ぎたり。佛教滅亡後も残り、信者數は少なきも富裕階層に多し。教義は佛教に酷似するも戒律嚴し。

3) カーリー 黒き女神の意、古くよりベンガル地方にて尊崇せられ、カルカッタの語源となる。

4) クリシュナ ヒンドゥー教三大主神の一なるヴィシュヌ神の化身、民俗信仰に於てシヴァ神と人氣を二分す。

5) シヴァ ヒンドゥー教三大主神の一、破壊の神として知られ、ヨガの創始者とせらる。